



～競技を越え、指導を考える～



「女子ソフトボール界にこの人あり」。女子代表監督としてチームを率いて、11年シドニー五輪、04年アテネ五輪と2大会連続で日本にメダルをもたらした宇津木妙子さん。闘将で知られる宇津木さんに女子の指導法の極意を伺ってきました。

インタビュー／北田典子

指導者はいまこそ原点に戻るとき

指導は自然体で

女子ソフトボールの指導にあたって約30年。指導者として最初に行ったのは、選手1人ひとりのプロフィールを把握し、分析することでした。家族構成はどうなっているのか、大家族か、核家族か、きょうだいは多いか、一人っ子か。また、女子選手は高校時代の指導者の影響をかなり大きく受けますので、どのような先生で、どんな指導で育って来たのか。あらゆる点から選手を分析し、理解するところからのスタートでした。

そんな様々な背景を持った選手たちと、常に自然体で向き合うことを心がけてきました。グラウンドに立てば「鬼の監督」といわれますが、それ以外では情けない姿も、バカなことをやったりするところも選手たちに見せてきました。試合では、常に頭を切り替えながらプレーをすることが求められます。私の姿を日常から見せることで、選手たちにメリハリをつけることの大切さを伝えてきました。

目はモノをいう

これまで様々な経験をしてきました。それが私をつくりあげ、選手たちに育てられてきました。その経験によって得たもののひとつが「目はモノをいう」。自信のある子は目を輝かせて話しますが、自信のない子はうつむき加減で話をする。そんなときは必ず「どうした？」と声をかけ、すべて吐き出させます。吐き出すという行為は気持ちに楽にするんですよ。

ね。そして、正面からだけでなく、後ろから、横から、いろんな角度でその子を見る。そうすると、状況がわかってきます。そして、調子が悪いときはもちろん、いいときも常に声をかけることを忘れなさい。人は見られているということ、生かされているところがあるからです。

原点に戻って指導を

柔道界からの問題提議。これは日本のスポーツ界が抱えてきた問題です。競技の壁を越え、風通しのいい社会にするために、私たちはいまこそ原点に返ることが必要なのではないのでしょうか。指導の最終的な目標は勝ち負けではなく、「人」としての人間形成です。しかしながら、日本は豊かになりすぎ、子どもは「感性」が貧しくなっています。まずは「感性」が原点「おはよう」「こんにちは」「ありがとう」というあいさつから始め、自然に触れて感性を磨き、いい意味での日本人の美徳である謙虚さを大切にする。そんなことを意識しながら、これからも指導にあたっていききたいですね。

PROFILE

うつぎ・たえこ
1953年生まれ。埼玉県出身。中学1年からソフトボールを始め、世界選手権に出場。現役引退後は、日立高崎(現ビックカメラ高崎)監督に就任。1997年日本代表監督となり、シドニー・アテネ五輪でメダルを獲得。05年日本人女性として初の国際ソフトボール連盟に殿堂入り。現在、国際ソフトボール連盟副会長、(公財)日本ソフトボール協会副会長などのかたわら、NPO法人ソフトボール・ドリーム理事長を務め、各地の講演やソフトボールの普及活動、被災地支援などに力を注いでいる。